

地質調査所の特別展示(EXPOセンター1階)

「日本列島一石が語るさまざまな言葉」

坂本 亨 (地質部)
Toru SAKAMOTO

I 展示を終わって

筑波の EXPO '85も会期の半ばを過ぎた6月19日—6月25日 地質調査所が EXPO センター (EXPO 第2会場) のワークショップに出した特別展示「日本列島一石が語るさまざまな言葉」(Japanese Islands—What the rocks tell us) も 好評のうちに無事終了しました。会期は実質5日半だったのですが 予想以上の盛況でした。“観客動員5,000人以上”“地質標本館の1ヶ月分以上のPR効果”というのが“主催者発表”です。5,000人以上というのは 1週間のセンター入館者が2万人という処から控え目に割り出した数字で もう少し裏づけをいいますと “お土産用に”と用意した地熱調査のボーリングコアがモロブタ12枚分 重量にして250kg以上が4日目の日曜日午後でなくなってしまいました。黒曜石の岩片も同様で モロブタ3枚分が4日間で全部なくなってしまいました。パンフ類も 地調と標本館の要覧は何とか間に合いましたが 手作りの展示標本の説明文は 増刷に増刷を重ねて最終的には1,200部作ってまだ不足というベストセラーなみの出足でした。

この特別展示 そもそもは筑波にある研究機関がそれぞれ一週間交替で自分の所の研究内容を紹介する その仕事は電通が一括して引受け 予算は1機関当たり100万円 ということで始まったものでした。予算のことはさておき “調査所を紹介するための展示”を考えるに当



写真1 展示コーナーには熱気が溢れていました。

って どこに焦点をあてて紹介するか「テーマを絞り切れない」というのが 担当者に最後までつきまとった悩みでした。これは 所の業務内容が多岐にわたっているという面もありますが 同時に所の研究内容を1回限りの展示で紹介するという意図を真正直に受けとめすぎた面もあるのでしょうか。案はいろいろと出されては消えました。そして 展示の総合タイトルをどうするかも最後の最後まで担当者を悩ませました。

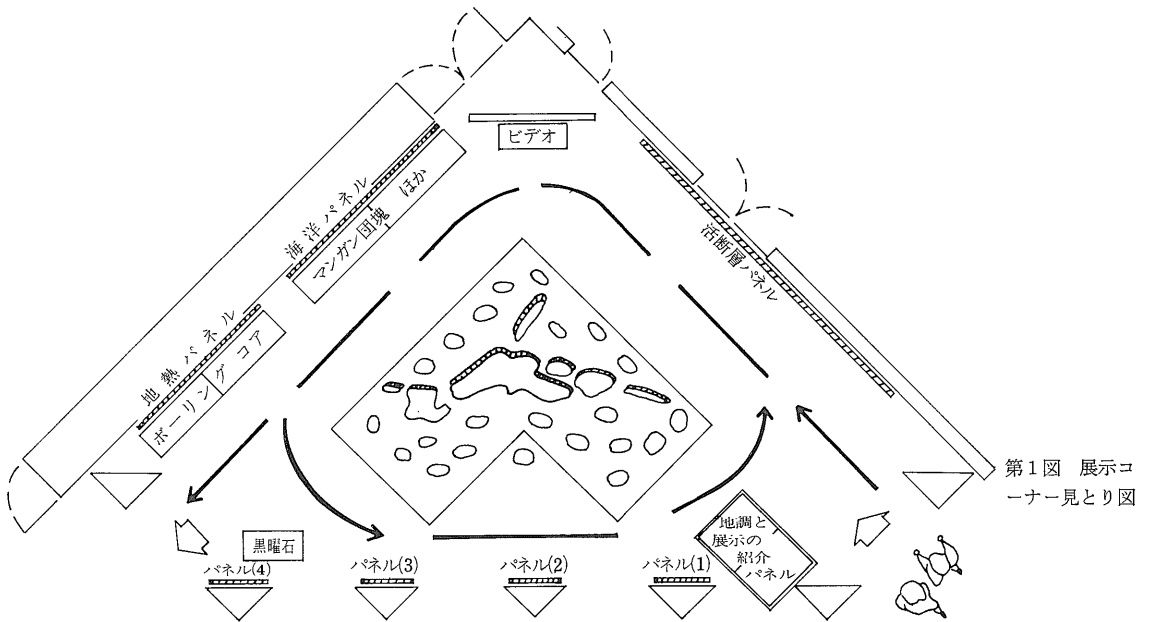
何回かの会合を重ねて 最終的に決った展示は次のようでした。すなわち 1)日本全体の100万分の1の地



写真2 海外からの観客も大勢



写真3 「これが地下1,000mの石」ボーリングコアを手にとって見る。



第1図 展示コーナー見とり図

質図を厚く裏うちして床面の中央に置き その周りを日本の代表的な岩石 化石 鉱物の標本で取り巻き かつ地質図との関連が判るようにするのをメインとする 2) 周囲の壁面には 所のビッグ プロジェクト「地震予知」・「海洋地質」・「地熱開発」の3本柱をパネルを主として展示する というものでした。話が進むうちに あれもこれもと標本の数が増えていったり パネルが大型化していったりしましたが 大筋はこんなところです。この他には 記念品がわりのお持ち帰り品として 岩手県八幡平の地熱調査で掘ったボーリングのコアの残り と長野県和田峠の黒曜石とを用意することになりました。

ということで出発しましたが 一つには適当な大きさの目星のする標本を集めるのが苦勞でした。標本課保管の標本だけでは半分も埋りません。 所員から

手持ちのものを出してもらったり これと目星をつけたのを新たに採集して来てもらったり 関連した所へ依頼したりで 最後の標本が到着したのは会期も間近の6月に入ってからでした。分野別パネルの方は 内容が絞りやすかったせいもあって それぞれの専門で手際よく進行していましたが。

さて 何はともあれこうして幕を開けてみると 初日から予想以上の大勢の客が集まって来ました。驚いたのは ボーリングコア——何の変哲もない ただの変質安山岩の丸棒や半円筒型のもの——が意外に好評だったことです。「記念に」という目的だけではなくたようですが モロブタ5枚分用意したのが 木曜日 金曜日の2日間ですっかり無くなってしまい 慌ててモロブタ4枚分 さらにカゴ2杯分を補充したのですが それでも日曜日の午後には終わってしまいました。黒曜石の方も同様です。先史時代の石器の材料ということがアピールしたのか 美しい漆黒のガラス光沢にひかれたのかモロブタ2枚分がたちまちなくなり、その後は追加したり。岩石を小割りにして数を増やしたりのテンテコマイでした。黒曜石の方は センターのコンパニオン諸嬢にも人気があったようです。

床面中央の展示は 高さ40cm位の舞台を作って その上に地質図(厚さ6cmの白色発泡スチロールに貼りつけたもの)と33個の大型岩石標本を配置しました。この広い舞台を半日で作り上げた会場担当者の腕はたいしたもの。この展示では いろいろな岩石が並べてあるので 入場者の誰もが一度はどの石かの前で足を止め

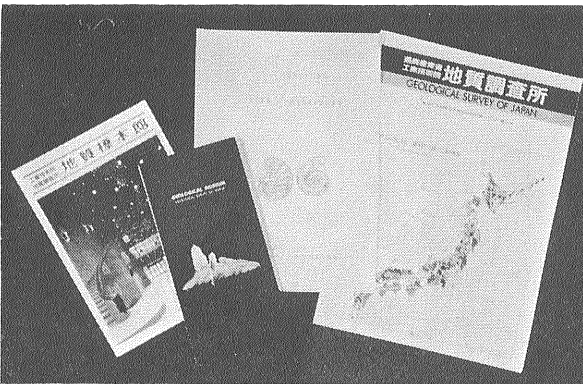


写真4 会場で配布したパンフ類



写真5 標本と地質図の配置

眺めたり触ったりしていたようです。中でも入場者の興味をひいたのは 会場入口に近かったせいもありますが 黒曜石とアンモナイトでした。アンモナイトの化石はやはり子供達の一番人気でしたが 付添いの人と一緒に入ってきた眼の悪いお婆さんが コンパニオンに手をとってもらってぐるーっと一周なで廻し 「これがアンモナイトなの？ 大きいですね」とニッコリされたのが印象に残りました。この人にとって 万博に参加する数少ない機会だったのかも知れません。黒曜石の方は 本物の矢尻の標本を一諸に並べたのもよかったようです。また釜石の鉄鉱石には小さな磁石をくっつけておいたのが成功だった様で 随分多くの方が 大人も子供も 磁石を手にとって 「鉄鉱石にはくっつく」「黒

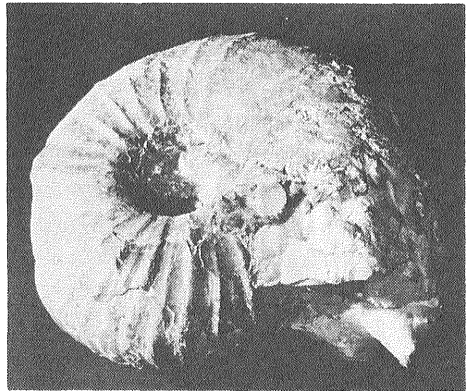


写真6 一番人気はアンモナイト化石

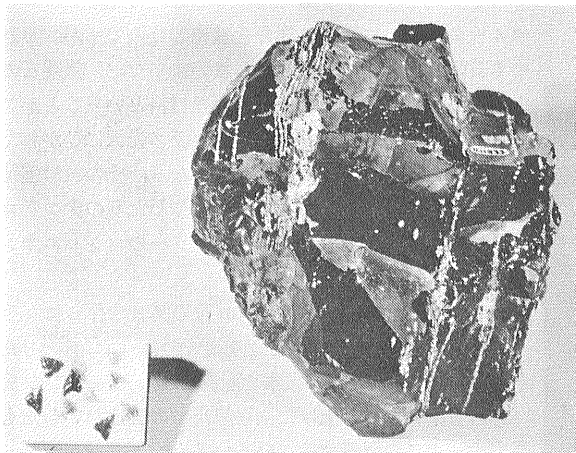


写真7 黒曜石も好評でした



写真8 磁石 くっつくぞ



写真9 お父さんも説明役



写真10 母と子の地学教室

鉱にはくっつかない」と確かめていました。「見て触って楽しむ」展示には いろいろと小道具の工夫が必要です。

この他 ごく普通に見られる石にもかかわらず 稲田の花崗岩が随分話題になっていました。“巨大な水晶”は照明効果と相まって 子供達に人気がありました。

那智黒（黒色泥岩）や赤間硯の原石（インクストーン—赤色凝灰岩）は どちらかという と 熟年の関心を呼んだようです。見ていると お父さんが子供に教えたり お母さんと子供が一語に話を聞いたり 対象が身近なものだけに あちこちで話はずんでいたようです。

一方 壁面の展示では 50万分の1活構造図9枚を貼り合わせた 天井まで一杯の大型パネルが関心を集めました。これには地図上の活断層と対応するかたちで各種の写真やイラストが貼ってあったのですが 多くは「自分の住んでいる処はどうなっているか」に関心をも



写真11 活断層のパネル



写真12 海洋地質のパネル

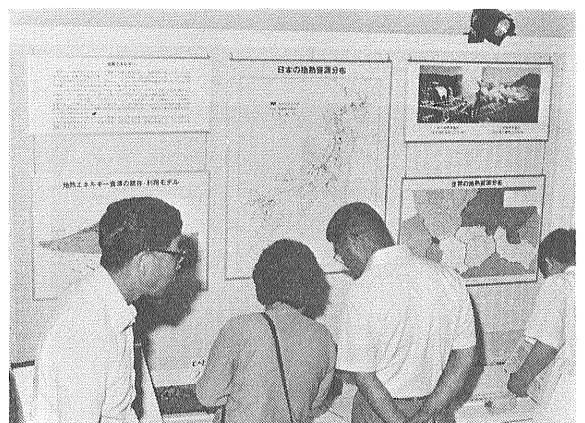


写真13 地熱のパネル

たれたようです。「海洋」と「地熱」の展示では綺麗なパネルとともにむしろそれ以上にマンガン団塊やボーリングコアの実物に興味が集っていました。

こうして見ていくと地質調査所の展示はあれもこれもと盛り沢山で焦点を絞り切れなかったことは確かです。しかしそのことが逆に作用していろいろな人が展示のどれかには興味を抱いてつい立ち止まる手を触れてみるという効果を生んだのではないのでしょうか。近頃はやりの一点集中的なクールさはなかった訳ですがあるいはこんなところに博覧会の本来の姿があるのかも知れません。筑波の万博がハイテク中心の“イメージ万博”といわれるようにいささか映像に対して食傷気味であるのに比して地調の展示は実物を並べて本物の岩石を化石や鉱物を見て触ってもらい石の美しさ石の面白さをその人その人の感覚で感じてもらおうという意図があったのですがその点ではかなりうまく行ったのではないのでしょうか。

こうしたイベントの裏にはいろいろなエピソードが生まれます。展示標本のうちの「級化砂岩」の上下判定をめぐって説明員の意見が2つに割れてしまったのもその一つです。あまりつつ込んだ説明を求められなかったので内部矛盾を暴露せずにすんだのですが、あるいは他の標本についても「角閃石岩(hornblendite)」か「角閃岩(amphibolite)」か意見が分れていました。

それと難しい質問に備えて「虎ノ巻」も準備したのですがこれは全く使う機会がありませんでした。質問というのはいつでも予想外です。現場で“さまざまな言葉”を語るのには“石”ではなくて“説明員”の役割のようです。

何はともあれこれだけのイベントになると全所的な支援協力が不可欠です。今回の展示でも展示用の大型標本の収集から取捨選択説明文の作成あるいは標本の切断・研磨標本を載せる台座の作成あるいは

写真・ビデオの撮影お土産げ用標本の調製や水洗いなど随分多くの方々の協力を得ました。特に大阪・名古屋出張所の方々にはこの機会に地調の展示用標本を充実させようと努力して頂きましたし所外では下記の諸機関・企業から標本の提供を受けました。誌上をかりて厚く御礼申し上げる次第です。

北九州市立自然史博物館

日鉄鉱業株式会社

那智黒総本家 瀨美堂

中野組石材工業株式会社

宮崎製陶株式会社

木の薬化石園

以下できるだけ忠実に展示の内容を紹介することにしめよう。

Ⅱ 展示の内容

(1) 紹介パネル

イ) 地質調査所の紹介：地質調査所の全景写真入りのこのパネルの内容は省略します。今地質標本館の正面ホールに懸っていますから。標本館のなかに地質調査所を紹介する文章がないことに気が付いて早速活用しています。

ロ) 展示の紹介：石が語るさまざまな言葉 (Japanese Islands—What the rocks tell us)

「日本は国土が狭い割には実にさまざまな岩石からできています。これは日本列島が太平洋を取り巻く変動帯に位置しており10数億年前から現在まで非常に複雑な過程を経て形成されてきたからです。

ここでは日本列島で見出される岩石・化石・鉱物のうち代表的なものを選んで展示しました。中央に置いた100万分の1地質図でも日本列島は100種類もの単元に区分されているのですから展示標本がそのうちのほんの一部にすぎないことが分かるでしょう。

とはいえ日本列島の実態を知るためには教科書や映像だけでなく直接実物にふれてみるのが大切です。どんな理論や学説もつまるところは現在の日本列島を作っている岩石の生い立ちについてきちんとした説明を加える必要があるからです。

地質調査所では日本列島とその周辺の地球科学的実態を把握し説明するため多分野にわたる仕事をしています。壁面にはそのうちの“ビッグプロジェクト”として1)地震予知2)海洋資源3)地熱開発に関連した研究の成果を展示しました」

これは展示を貫くテーマを解説するためのパネルなのですが中央展示の紹介に重点が偏ってしまいました。また、総合タイトルには随分苦労しました。

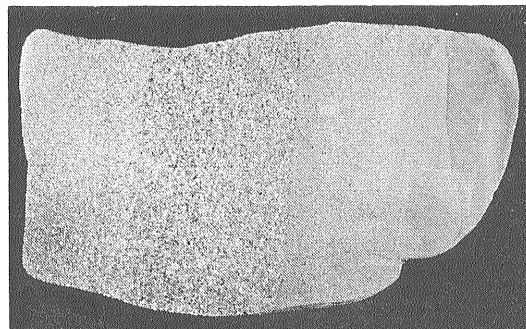


写真14 どちらが上か下か？ 級化砂岩

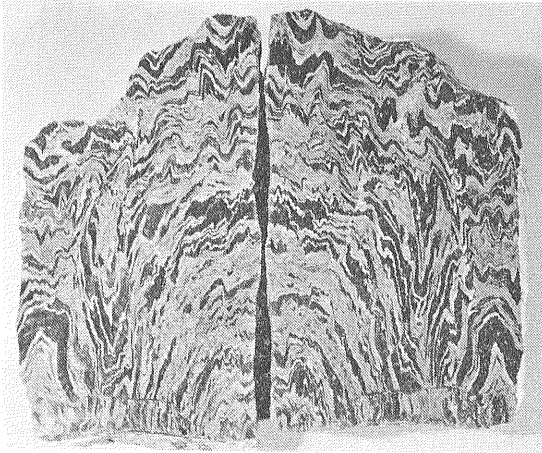


写真15
神居古潭の変成岩

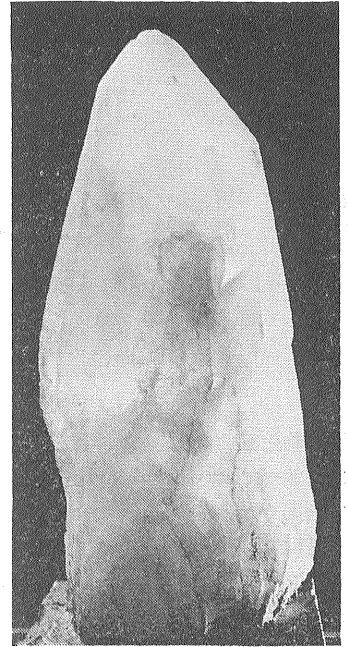


写真16
巨大な水晶

(2) 中央床面の展示

中央におく100万分の1地質図は 日本地質アトラス(1982)よりは古い版ですが 全4枚のシートになった1978年版(第2版)を使いました。これに厚さ6cmの白色発泡スチロール板を裏打ちして 日本列島の概形(ほぼ水深200mの線)に沿って切抜いたものです。その現物は いま本館から標本館への渡り廊下に展示してあります。

この地質図を取り巻いて配置する地質標本については 始め地質図の凡例に合わせて1個づつなどと考えたのですが それでは100個以上にもなって とても会場に納まりません。結局“代表的な”ということで 人間生活に縁の深いもの 大型で見ばえのするもの 等々むしろ適宜選んだといった方がよいかも知れません。この段階では 神居古潭の変成岩や南硫黄島の玄武岩 硫球石灰岩 オリビン団塊を含む玄武岩など所員の秘蔵(?)の標本を提供してもらったり フィールドで半日ばかりで採集してもらったりしたものも少くありません。また 赤白珪石は日鉄鉱業 畑鉱山から 那智黒(黒色泥岩)は壽美堂から それぞれ大阪出張所を通して寄贈されたものですし 蛙目粘土(陶土)は 名古屋出張所を通じて愛知県陶磁器工業組合から寄贈を受けました。

また 始めは標本と地質図上のその産地を糸かワイヤーで結ぶことを考えましたが 標本の数が多くなると糸がコンガラガってかえって見にくくなります。最後は番号で対応させることに落つきました。今回の展示に使った番号の数字は 実はカレンダーの日付けから切り抜いたもの。意外なところで 数字だけのカレンダーが役立ちました。

以下に展示標本のリストと多少のコメントを並べます。

- 1) 黒曜岩(北海道白滝): 入口近くに置かれていたせいもあって 最も注目を集めた標本の一つです。矢尻の現物を一諸に並べたのも効果的でした。
- 2) 神居古潭変成岩(北海道旭川): 美しい褶曲模様で人目を引きましたが 色合がちよっと地味だったかも知れません。
- 3) 石炭(北海道石狩炭田): 同じように真っ黒な隣の黒曜岩と引較べて「こっちは燃えるのに どうしてあつちは燃えないのか」という質問がありました。
- 4) アンモナイト(北海道美唄): これも人気標本の一つ。「大きいなあー」というのが まず聞える嘆声でした。もっと大きなPachydiscusくらいを出した方がよかったかも知れません。「持ってみるか」と抱え上げさせた東京の中学生は「ヒヤー 重い! 重い!」と感激していました。
- 5) 黒鉱(秋田県大館): どういう訳か 隣の鉄鉱石の方に人気が集まっていました。
- 6) 緑色凝灰岩(秋田県大館): もっと鮮やかな濃緑色のグリンタフ標本を日頃から用意しておく必要があります。
- 7) 鉄鉱石(岩手県釜石): マグネットをくっつけたり離したり 隣の石にはくっつかないことを確かめたり 大人も子供もたいてい一度は触っていたようです。
- 8) 礫岩(宮城県登米): 花崗岩や火山岩の礫が入り混った礫岩を陳列したかったところ。
- 9) 水晶(福島県石川): 大きさを圧倒していたようです。照明はさすがプロでした。

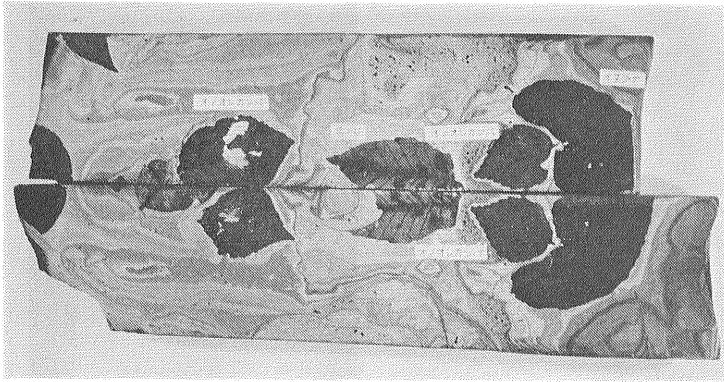


写真17
栃木県塩原産の植物化石

- 10) 植物化石 (栃木県塩原)：化石と現生のものの葉脈標本を並べておいたのがミソでした。葉脈標本の作り方を聞く人が何人かいました。
- 11) 花崗岩 (茨城県稲田)：ごく普通の石材なのに多くの人が立ち止って手を触れていました。説明文に“みかげ石”というひと言が必要でした。
- 12) マグロ化石 (茨城県谷田部)：マグロの背骨は実はレプリカ。一諸に並べたオニフジツボ (クジラガキ) の説明がなかったので (後から急拠追加したため) 分かりにくかったようです。谷田部在住の原標本提供者も見に来て満足そうでした。
- 13) パラ輝石 (栃木県横根山)：きれいなピンク色で会場に彩りを添えました。
- 14) 三宅島の溶岩 (東京都三宅島)：「日本でもっとも若い岩石」というタイトルで人目をひきました。
- 15) 南硫黄島の岩石 (東京都南硫黄島)：「火山列島最南端」という言葉もあり印象的ではなかったようです。日本最南端ともいえませんし。
- 16) 陶土 (愛知県瀬戸)：カップと並べて置いたのですが

両方を結びつけて見る人は少なかったよう。展示にもう一工夫必要でした。

- 17) 黒色泥岩 (三重県熊野)：「那智黒」の原石ということで多くの人が真っ黒で光沢のある研磨面に指先を触れ石の感触を確かめていました。基石を一諸に並べましたが“白”の原料は何かという質問の方が多かったようです。
- 18) 和泉砂岩 (大阪府岬町)：級化構造による地層の上下判定が専門家だけでなく一般の人でもまき込んで論議の種となりました。しゃがみ込んでじっくり見入っていた人が結構いました。それほど特徴的でもないこの標本がこんなに興味を呼ぶとは意外でした。
- 19) 三波川結晶片岩 (愛媛県佐々連)：これももっと良い標本を集めておく必要があります。
- 20) 硫球石灰岩 (沖縄県宮古島)：隣りに秋吉石灰岩を並べたため大きさも質感もいささか貫録負けでした。
- 21) 阿蘇 溶結凝灰岩 (熊本県産山村)：どこへ出しても恥かしくない良い標本なのですがあまり質問が来ま

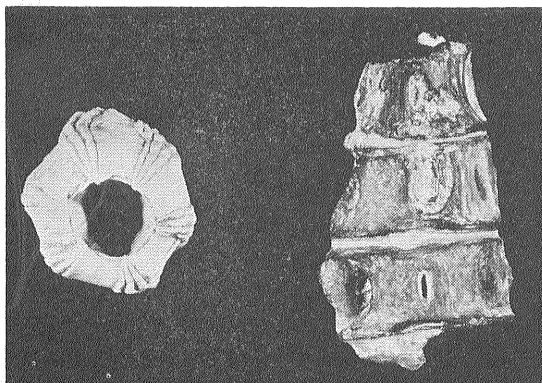


写真18 地元 谷田部産のマグロとオニフジツボの化石

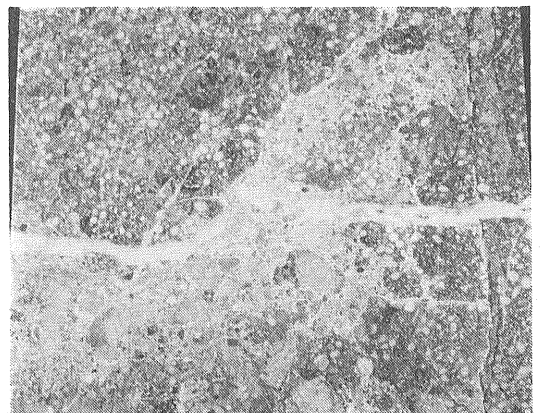
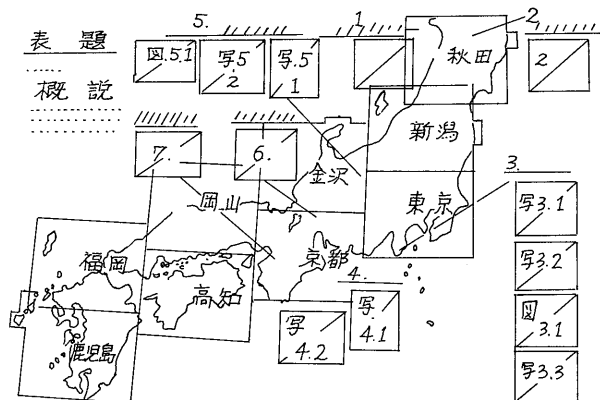


写真19 秋吉台の石灰岩



第2図 活断層のパネル見とり図

せんでした。薄板状の標本は迫力の点で不足するのでしょうか。それに“溶”の字が良くありません。

- 22) 角閃石岩 (長崎県長崎市)：緑色の針状結晶が放射状に伸びた美しい標本。原産地ではどうなっているかという質問が割にありました。
- 23) JB-1 (長崎県佐世保市)：この玄武岩は ちょっと迫力不足でした。高純度粉末の製法を説明すると 感心されるのですが。
- 24) 含オリビン団塊玄武岩 (佐賀県玄海町)：説明をもっと分りやすくする必要がありました。
- 25) インクストーン (山口県下関市)：添えものの赤間硯の方に人気が集まりました。「高いんでしょうね」という声しきり。
- 26) 秋吉台石灰岩 (山口町秋芳町)：北九州市立自然史博物館からの寄贈品です。お土産で売っている灰白色の石灰岩と違うので 戸惑った人が多かったようです。

ルーペか眼鏡を備えてフズリナを覗かせるなどの配慮が必要でした。

- 27) ウラン鉱 (鳥取 岡山県境 人形峠)：ガイガーカウンターやミネラライトの実演をすると 人が集まります。こうした大小の演出がもっと必要でした。
- 28) 赤白珪石 (兵庫県篠山)：立派な標本なのですが 説明文の方が地味でした。それと 以下の標本に共通することですが 会場の配置のため 日本海側が裏通りになって 人目を引くことが少なくなったのは残念でした。
- 29) 飛驒片麻岩 (富山県利賀村)：「日本最古の岩石」ということで関心を集めました。貫録も充分の標本です。ただ 演出効果の点では 三宅島溶岩と並べて置くなどの柔軟さが必要だったかもしれません。
- 30) 金鉱石 (新潟県佐渡)：予想どおり「どこに金が入っているのか」というのが多くの質問でした。自然金の塊りを添えるとよかったかも。大胆すぎて考えつかなかったのですが。
- 31) 原油 (新潟県出雲崎)：石油文明の時代というのに 原油を見たことのある人は 予想以上に少ないものです。
- 32) 含貝化石砂岩 (青森県鰺ケ沢)：マル標印の標本から持ち出して来たとは誰も思わないくらい堂々としていました。含まれている貝化石の名前や生態を尋ねられたりしました。
- 33) 日本海底のボーリングコア (津軽沖)：海底下の新第三系の基盤になっている花崗岩を展示したのですが 分かり難かったようです。イラスト入りの説明にするとか 深度の数字を出すとかが必要でした。



写真20 ガイガーカウンターをあててみると

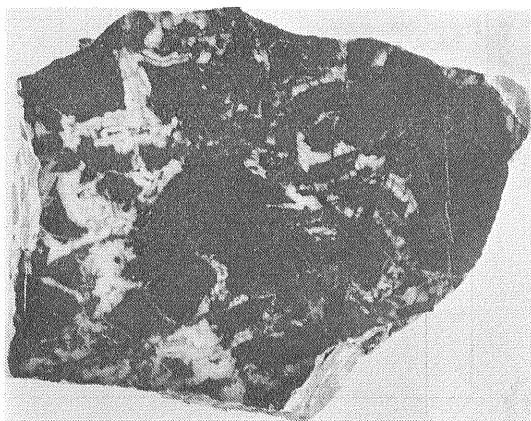


写真21 丹波の赤白珪石

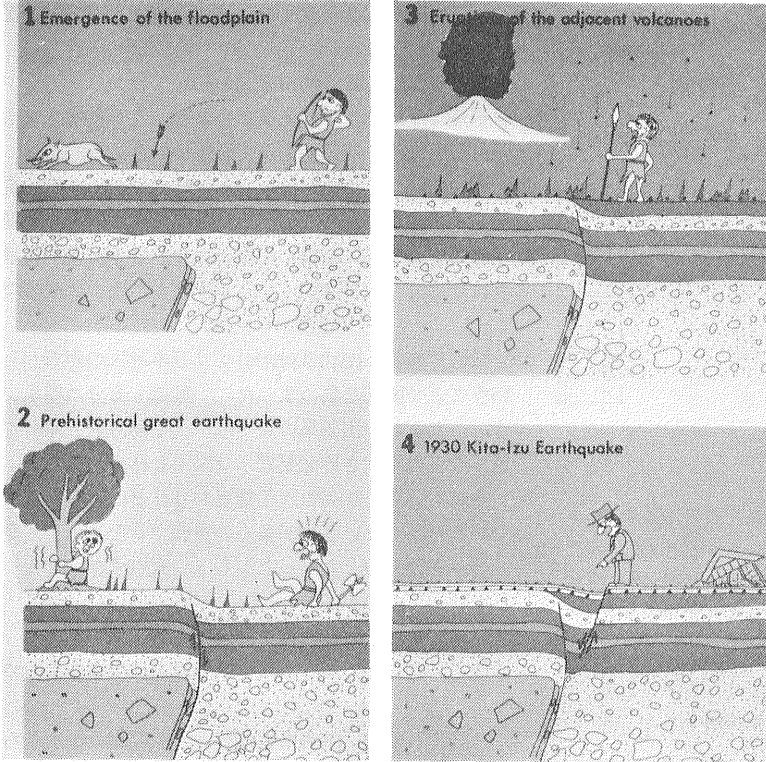


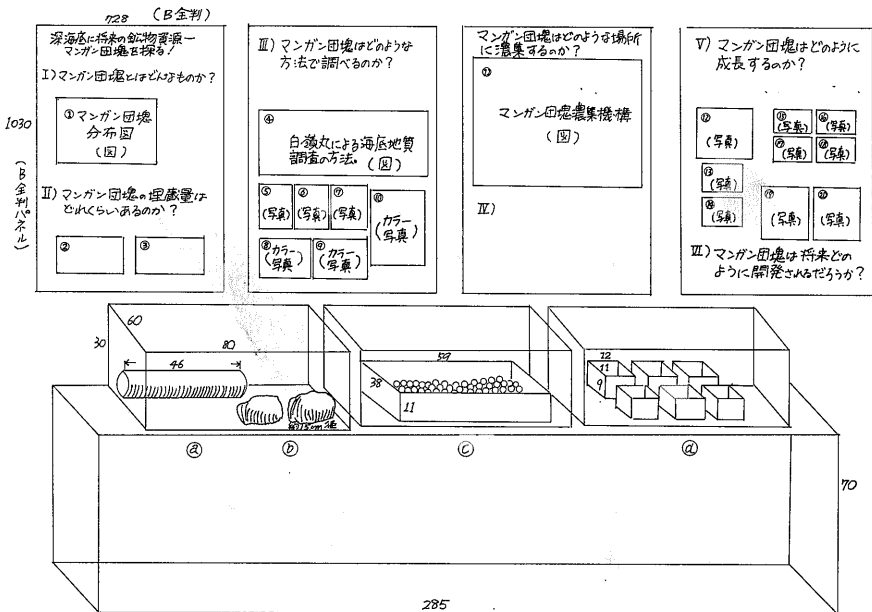
写真22
山崎氏の手による活断層のイラスト

(3) 壁面の展示

イ「活断層とその調査」地震予知の分野は 活断層に焦点を合せました。ここでは 50万分の1の活構造図9枚を

貼り合せてベニヤ板で裏打ちした たて2 m よこ 3.6m の大パネルで まず注目を集めました。パネルでは 活

深海底に将来の鉱物資源マンガン団塊を探る!



第3図
マンガン団塊のパネル見とり図

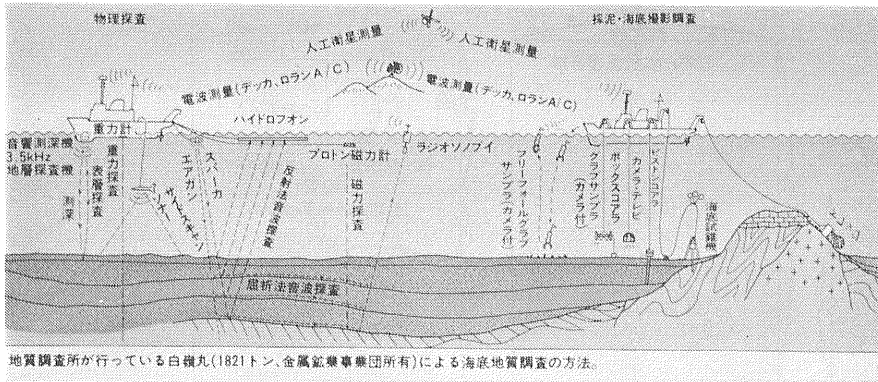


写真23

河村氏の手による海底地質調査のイラスト

断層のうち歴史時代の記録のあるものを青 その他のものを赤テープで上貼りして分りやすくしました。また地図の周囲には 地震の被害状況や活断層の発掘調査を写真やイラストで示しました。その内容は次のようです。

1. 日本海中部地震(昭和58年5月26日)の被害
2. 千屋断層の断層崖(秋田県仙北郡千畑村)
3. 伊豆の活断層と地震
 - 3-1 浮橋中央断層の発掘から分った断層運動の歴史
 - 3-2 姫ノ湯断層の発掘調査
 - 3-3 伊豆大島近海地震(昭和53年1月14日)で現われた活断層
4. 「しんかい2000」による海底活断層の調査
 - 4-1 着水寸前の「しんかい2000」
 - 4-2 駿河湾の中を南北に走る海底の凹地

5. 阿寺断層

- 5-1 岐阜県坂下町上空から見た阿寺断層
- 5-2 阿寺断層の発掘調査
- 5-3 同上 発掘壁面のスケッチ

6. 根尾谷断層 水鳥の断層崖(岐阜県根尾村)

7. 古墳を切る活断層(大阪府羽曳野市)

イラストは 担当者の山崎氏の自作。うまいものです。観客の関心は「自分の家の近くは?」というのが最初で 大画面に顔を近づけていました。西日本の人は いく分安心して帰ったかも知れません。古墳を切る断層では どちらが落ちたのか? など聞かれました。

ロ) 「深海底に将来の鉱物物資マンガン団塊を探る」

海洋の分野はテーマをマンガン団塊に絞りました。ここでは 1) マンガン団塊とはどんなものかから初まって 2) その埋蔵量 3) 調査法 4) 濃集 5) 成長 6) 将来の開発の順でパネルによって解説しました。パネルに使った図は「世界の海洋底におけるマンガン団塊の分布」・「陸上鉱床との埋蔵量比較」・「海底地質の調査法」・「マンガン団塊の濃集機構」など。このうち最後のイラストは 総務部の河村氏の手になるもの。調査所には実に多彩な才能が隠れています。写真は 海底写真やマンガン団塊を切断・研磨した断面写真(顕微鏡や電顕によるものを含む)15枚でした。実物標本としては マンガン団塊の実物がs型・r型それぞれモロブタ1杯分づつ それに団塊の切断面を示したものの数個と熱水性マンガクラスト 深海底の泥の採泥器に入ったままのものなどで すべてアクリル製の大きなカバーに納めました。

ここでの観客の反応も どちらかというマンガン団塊の実物に集まったようです。「硬いのか? 崩れやすいのか?」「どうやって採り上げたのか?」等々です。

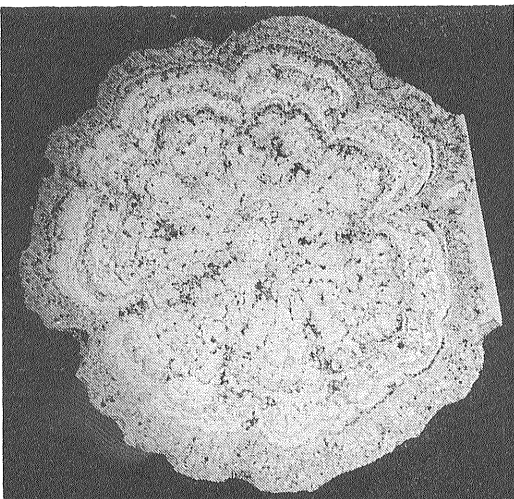
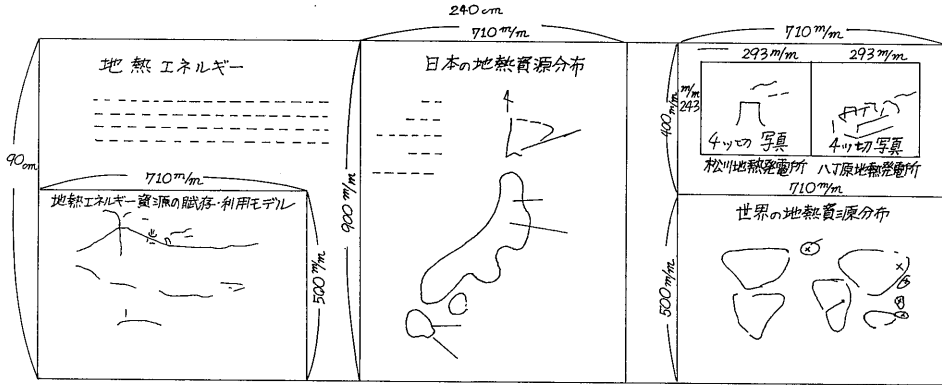


写真24 マンガン団塊の断面(顕微鏡写真)



第4図 地熱資源パネルの見とり図

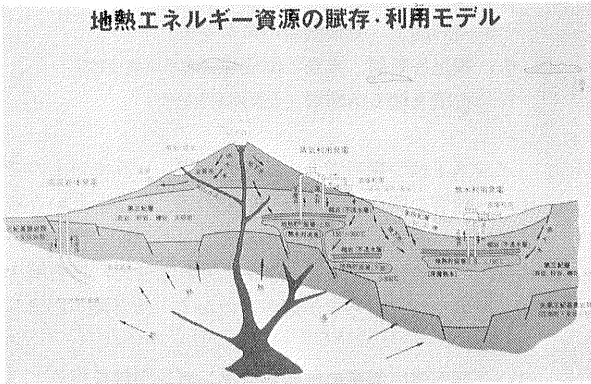


写真25 地熱資源開発モデルのイラスト

「どうしても」ということでアクリルケースを外してマンガン団塊に触らせて上げた方もありました。

ハ) 地熱開発

ここでは 地熱エネルギーの全般的な解説につづいて日本と世界の地熱資源の分布 地熱エネルギー資源の賦存・利用モデル 松川と八丁原の地熱発電所の全景写真をパネルにしました。 その解説は次のようです。

「地球上に分布する火山は プレート運動と密接な関係があり 地熱地帯の多くはプレートの沈み込み帯（海溝）の後背に位置しています。 日本列島には約 200 の火山があり これに関連する地熱地帯が全国におよそ 85ヶ所知られ すでに 9ヶ所の地熱発電所（総出力215, 100kw）が稼動するなど日本は地熱資源に恵まれた国であると言えます。

火山の地下深部には 高温のマグマ溜りがあり この熱によって地下に浸透した雨水（地下水）は暖められます。 暖められた水（熱水）は割れ目やすき間の多い地層（地熱貯留層）の中にためられます。

地熱エネルギーを資源として利用するためには まず地表から様々な調査によって地熱貯留層のありかを探し当てること

が必要です。 次に深さ数100mから3000mの生産井を掘って貯留層から熱水を取り出し 発電や暖房など様々な目的に利用し 使用後の熱水は還元井によって地下に戻されます。

石油や石炭などの天然エネルギーの中で占める地熱の割合はまだまだ小さいのですが 日本の豊富な地熱エネルギー資源の開発・利用はエネルギー資源の多様化という点で大きな意義があると言えます」

(4) ビデオコーナー

公開初日に急遽作成した展示解説のビデオが好評。 これと企画室で手持ちの「偏光顕微鏡の世界」「筑波山周辺の鉱物産地を訪ねて」「地質構造のシュミレーション実験」「地熱エネルギー・地熱情報データシステム」を常時上映しました。 客が見ていても見ていなくても こうした画面をバックに流しておくことは 会場の雰囲気盛り上げるのに効果的です。

なお EXPOセンター2階のAVホールでは この期間中 地質標本館から借り出した次のような映画とビデオを時間を決めて上映していました。 火山や深海底の映画は ホールのスタッフの間でも好評だったそうです。

映 画 (16mm)

- 生きている火山
- 中部太平洋の鉱物資源を探る
- 深海の世界
- 海底の地質を探る

ビデオ (3/4インチ カセット)

- 生きている火山 (英語版)
- 中部太平洋の鉱物資源を探る (英語版)
- 白嶺丸船上調査 (英語版)
- 地質構造のシュミレーション実験
- 筑波山周辺の鉱物産地を訪ねて

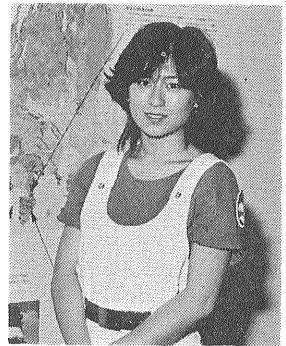


写真27 会場に花を添えたコンパニオン3人 左から小林里佳さん 青木麗さん 幡利恵子さん

地下水による地震予知
活断層から大地震を探る
偏光顕微鏡の世界
地熱エネルギー 地熱情報データシステム
(5) お持ち帰り品

八幡平のボーリングコアの残りと和田峠の黒曜石とを用意しましたが 最初にも書いた通りの大好評でした。余程大量に最初から準備しておかなくてはなりません。ボーリングコアの場合 両端を切り揃えて半円筒型に整形したもので しかも深度の数字を記入したものが好まれたようです。なお サンプルについてはあまり減り方が激しいせいもあって 途中から 持って行く人には住所・氏名・年齢などを記入してもらうようにしました。それによると 入場者はやはり学園都市在住者と常磐線沿線の人達が圧倒的でしたが 遠くは岩手県や宮崎県という記入もありました。しかし 何といても最遠方はブラジルからの研修生。本当にブラジルまで持って帰ってくれると嬉しいのですが。



写真26 黒曜石の人気は上々。

III あとがき

以上で EXPO センターでの特別展示に関する報告は終りです。今後のために記録を残しておくようにと要請されて書き始めたのですが 長すぎたかも知れませんが それでもまだ書き忘れていたことに 観客のマナーが非常に良かったことがあります。当初心配したような標本や添え物がこわれたり紛失したりということは1件もありませんでした。那智黒に添えた基石10個がそのまま返って来たくらいですから。また 観客は意外と内気です。自分の方から尋ねかけてくるということばほとんど例外的です。一度こちらから話しかけるとその後 次々と質問が続くのですが 押しつけにならないように説明するというのは 容易なことではありません。最後に この展示に協力して頂いた所員や関係者 EXPO センターの担当者 とくに武骨な展示に花を添えて頂いた3人のコンパニオンの方々に謝意を表します。そして この特別展示を担当した委員会のメンバーは以下のようなのです。

EXPO センター ワークショップ展示特別委員

全体： 坂本 亨

中央展示： 山田直利・豊 遥秋

壁面展示： 山崎晴雄（活断層） 盛谷智之（深海底） 金原啓司（地熱）

調整： 奥村公男

（写真はすべて山本洋一氏による）